

二〇二六年度 看護学科学学校推薦型選抜試験問題



小論文問題用紙

〔設問〕 次の文章を読んで、

- (A) 本文の要旨を二百字以内でまとめ、
(B) 「AIの専門知識を持たずとも容易に利用可能な時代に突入しつつある状況のなかで、人がすべきことを、AIを道具として活用することで前に進めていけば、新たな可能性が見いだせる確度は高い」という意見について、あなたの考えを四百字以内でまとめなさい。

「AIに仕事が奪われる職業ランキング」なるものを度々目にする。*Deep Learningが登場した初期の頃のランキングでは、知的労働分野に比べて定型作業や接客といったブルーワーカーのほうがより仕事を奪われると捉える傾向が強かった。しかし、生成AIが登場すると、安泰だと思われていたホワイトカラーのほうが仕事を奪われる可能性が高いのだという。

そもそも、テクノロジーは人が楽をするため、より日常を便利にすることが目的であり、それまで人がやっていた作業と置き換えるために生まれたものである。産業革命で蒸気機関が発明されたことで、馬車がなくなり、電卓が発明されたことでソロバンが不要となり、ロボットの登場で自動車を組み立てるのはロボットの仕事になった。この流れでオフィスでの作業のための文書や表を作成する各種アプリケーションが開発された。現在のAIも、人がやりたいことを代わりにやってくれるこれまでのテクノロジーの一つであることに違いはない。

我々は当たり前のように電卓を利用するが、それは電卓が便利だからであり、「電卓に計算能力を奪われた」と悔しがめることはまずないだろう。では、なぜAIに限って「奪われる」という認識を強くするのか？

力仕事も計算も記憶も人にとっては必ずしも得意なものではなく、この部分でのテクノロジーの活用に対してその正当性を主張することはできた。これまでのAIが可能にした将棋や囲碁や高度な科学技術計算などは、そもそも人が苦手とする分野であった。実はAIにとってはそのような分野のほうが対応しやすく、人にとって当たり前の「流暢にしゃべること」や「常識を扱うこと」のほうが苦手だったのである。

しかし、*ChatGPTが可能としたのが我々の日常生活における最も根幹であるところの言葉を操る能力であり、人ならでは、そして人にとって当たり前の能力である。ここへきて、人にとって当たり前のことをAIができるようになると、それは誰にも関係することになり、対岸の火事ではなくなった。そして、「そもそも人が苦手とすることが、できるようになったのだ」という言い訳もできなくなったことなどが、AIに対して脅威を感じることに繋がったということであろう。

ChatGPTは壁打ち的に使うことで推想支援に使うことができるものの、主にその能力を発揮するのは、大量文書の要約や、定型文書や文書からの表の作成、パターンのなプログラム書きや間違い探しなど、よくよく考えると決して創造的なタスクではなく、我々にとっても面倒な作業ばかりである。つまり、これらのタスクはそもそもAIに任せればほうがよいわけであり、残念ではあるが、AIへの置き換えによる人員配置の見直しは広範に起こることは間違いない。これは、人がやるべき仕事は人がやり、AIで済むことはAIで済ませるという当たり前の棲み分けをするときがいよいよ来たということになる。ここで、人がやるべきタスクとは何かといえは、創造的タスクや、人の感性や感情が関与する類いのサービスに関するタスクなど、「新たな価値を生み出す領域」と「人対人に関わる領域」が該当する。

AIは道具であり、その能力を発揮させるのは使う人次第である。AIの専門知識を持たずとも容易に利用可能な時代に突入しつつある状況のなかで、人がすべきことを、AIを道具として活用する

ことで前に進めていけば、新たな可能性が見いだせる確度は高い。一方で、進まなければ現状維持となるだけであり、進む人々とそうでない人々との差がどんどん開いていくことになる。

棲み分けを考える以前に、ここで考えなければならないのは、「我々自身がAI化しつつあるのではないか？」ということだ。日々の生活において我々が接する情報はあまりに多い。しかもそれらは自分で入念に選別したものではなく、プラットフォームの独自のアルゴリズムにより選別された情報である。知らぬうちに偏った情報に接しているのだ。また、重要な判断を短時間で下さなければならない場面も増えてきた。当然、じっくり考える時間はない。我々が一日にできる情報処理の量には限界があるが、それを超える情報に日々曝されれば、即断即決するしかなくなる。無論、その判断は、じっくり考えての判断よりも質は下がることになる。

しかし、人は楽をしたい生き物である。即断即決でそれなりに問題ないのであれば、じっくり考える必要はないと考えるようになる。それに即断即決といっても、判断をサポートしてくれる分析ツールや意見集約システム、それぞれChatGPTの出番であるが、これを駆使することでそれなりの品質が維持できるようになれば、さらに人はじっくり考えることはしなくなるわけである。

また、「注目されることに意味がある」というアテンション・エコノミーが台頭することで、真に価値がある情報、真に伝えられるべき情報が、目立ちたいだけの表面的な多数の情報のなかに埋もれてしまう現象も深刻化している。アクセス数が多ければ多いほど、そこに広告枠を持つ企業に対して広告収入が入る仕組みがあるからである。プラットフォームは広告収入が重要な財源であり、そのためにアテンション・エコノミーという流れを止めることは難しい。モラルに反する内容であろうが、注目されればお金になるのであればやるというわけだ。

こうした状況をふまえると、人というものが中身の無い表層的なシステムへと変貌しつつあるように感じてしまう。これでは入力に対して適当に出力を返す単純なシステム化である。AI化しつづけると言ったが、AIのような豊富な知識もなく、しっかりした文章を生成できるわけでもないとしたら、劣化したAI化である。これでよいわけがない。しかも、悪いことにAIのほうで、これから技術が発展することに伴って、豊かな感性や自ら考える自律性など、本来の人が持つ能力を獲得しようとしている。将来は、モラルもAIから教えてもらう時代がくるのかもしれない。さらには、内なる動機をなくし、単に入力される情報に対する香髓^{かみづ}反射的な処理をするシステムと化し、それでも安定して生存できるのであればそれでよい、という人々も出てくるのかもしれない。まさに人が動物レベルになるということであるが、それでよいわけがない。

明らかに言えることは、これまで以上に人本来の能力である創造力や状況認識能力、共感性、感性、そして人とのコミュニケーション力といった社会性を高めることの重要性である。

これらは、現在のAIはまだまだ苦手とする能力である。イノベーションを生み出すためのアイデアの種同士の繋ぐことでの新たな価値の創造は人にしかできないし、現在のAIは膨大な知識が詰め込まれているものの、五感を通してその場の状況を理解しての判断ができるわけでもないことは先に述べた通りである。社会性は人が生きるための根幹であり、社会性を持つアリのせよ魚にせよ、お互いが協調することで生存し続けてきた。そのためには人にせよアリのせよ魚にせよ、それぞれが自律性を持ち、自ら能動的に行動できる自律行動主体である必要があり、そもそも生命とはそのようなシステムであった。一方で現在のAIはまだ道具であり、高い自律性を持つに至ってはならず、人とともに豊かな社会性を構築する相手とはなり得ないのである。

これらの能力が育まれるのは中学生くらいまでであろうし、その重要な期間はAIやインターネットとの過度な接触は不要であると先にも述べたが、残念ながら理想とはいえない情報教育の弊害として、現在においてすでに若年層におけるこれら人間力の低下が懸念されている。しっかりした読解力や状況認識能力、そしてそれらを適切な言葉として表現できる能力がなければ、そもそもChatGPTを使いこなすことはできない。

注*1……Deep Learning (深層学習)

*2……ChatGPT (アメリカのOpenAI社が開発した対話型AIサービス)

(栗原聡氏『AIにはできない 人口知能研究者が正しく伝える限界と可能性』によった)